

## 【書 評】

Kohei Saito, *Natur gegen Kapital: Marx' Oekologie in seiner unvollendeten Kritik des Kapitalismus*, campus Verlag Frankfurt 2016, Taschenbuch 328S.<sup>1)</sup>

小 澤 光 利

齋藤幸平氏のドイツ語で書かれた論文『資本に対する自然』、その副題「マルクス未完の資本主義批判におけるエコロジー」は、もともと2014年にベルリン・フンボルト大学に提出された氏の博士学位請求論文(Dissertation)であり、本(2016)年8月になってドイツ・フランクフルトのキャンパス出版社(campus Verlag)から単行本(ポケット版)として公刊されたものである。本論文提出の2014年時点で齋藤氏は、ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー客員研究員(Gastforscher)であり、日本MEGA編集委員会編集委員として『新マルクス・エンゲルス全集(MEGA)』第IV/18巻の編集に携わっていた。

氏は現在カリフォルニア大学セントバーバラ校(UC Santa Barbara)の客員研究員である。

その後現在、同じ『新マルクス・エンゲルス全集(MEGA)』第IV部第18巻の編集作業から「晩期マルクスの物質代謝の思想」を読み解く佐々木隆治著『カール・マルクス—「資本主義」と闘った社会思想家』(筑摩書房2016年4月)が刊行されているが、この「ちくま新書」本は、初期マルクス・『資本論』のマルクス・晩期マルクスを通観する恰好のマルクス経済学入門書をなしている。

さて問題の斎藤氏の論文は、次の「前書き」と「序文」に始まる二部六章と「結び」の編別構成からなる。あらかじめ内容の概観を得るため、単行本においてやや簡略化され訂正された「目次」を、博士学位請求論文(Dissertation)における元の表記から補足しながら示しておきたい。( )内が補足個所である。

## 前書き

序文 今、マルクスのエコロジー？

## 第 I 部 エコロジーとエコノミー (Dissertationでは、「マルクス経済学批判の構成要素としてのエコロジー」)

### 第 1 章 近代成立にともなう自然の疎外

1. 哲学的範疇としての「疎外」
2. (近代と) 人間と自然との本来的な統一の解体
3. (マルクスの後期経済学文献に見る) 理論の継続性
4. 哲学からの決別 (フォイエルバッハからの決別と人間=自然関係の新たな把握)

### 第 2 章 経済学における物質代謝 (の役割)

1. あらゆる富の素材としての自然
2. 物質代謝概念の系譜 (物質代謝の概念史的分析)
3. (アルフレッド シュミットの物質代謝説とその) 人間主義的唯物論の限界
4. 「自然科学的唯物論」を超えて
5. 『要綱』における生理学の役割

### 第 3 章 物質代謝理論としての『資本論』(マルクス物質代謝論における資本の限界)

1. (人間と自然との) 超歴史的物質代謝としての労働過程

2. マルクス理論の核心としての物象化
3. (マルクスの経済学批判における)「素材」と「形態」
4. 物質代謝の資本主義的変容 (資本と、人間と自然との物質代謝の変容)
5. 自然における資本の矛盾 (資本主義的生産様式のもとでの自然生産の矛盾)
6. 資本に対する自然

## 第II部 マルクスのエコロジーとMEGA (抜粋ノートにみるマルクスのエコロジー)

### 第4章 リービッチと『資本論』(リービッチの農芸化学と自然限界の認識)

1. 1865年以前のマルクス地代論 (の概観)
2. リービッチの自然限界についての認識
3. ロッシャーのリービッチ受用(ウイルヘルム ロッシャーのリービッチ受容と耕作の集約化)
4. (マルクスの)近代農業集約化への批判?

### 第5章 略奪耕作への肥料? (マルクスの資本主義批判の転換点としての物質代謝に関するリービッチ学説)

1. 楽観主義か悲観主義か? (マルクスのロンドン・ノートと収穫逡減の法則)
2. (ロンドン・ノートにおける)19世紀の楽観的化学者
3. (ローズとギルバートの窒素理論に対する)リービッチの問題への論駁
4. (リービッチの新たな物質代謝説とマルクスの)近代農業批判の生成
5. エコロジー帝国主義とグローバルな危機
6. (自然力の)浪費から持続的な生産へ

## 第6章 1868年以後のマルクスのエコロジー（フラスと物質代謝論の新地平）

1. リービッチ（の鉱物理論）への（マルクスの）疑念？
2. （リービッチの土地疲弊理論と）「マルサスの亡霊」
3. （フラスの）「農業物理学」との（マルクスの）出会い
4. （リービッチ土地疲弊論批判としての）フラスの強力耕作と沖積理論
5. （人間）文明の危険としての気候変動
6. 素材世界の限界としての気候変動

結び

### 〈参考文献〉

人名索引

マルクスは『資本論』第1巻冒頭第1章の商品論において、「労働は、…人間と自然との間の物質代謝を、したがって人間の生活を媒介するための、永遠の自然必然性である」、また「労働は、それによって生産される使用価値の、素材の富の唯一の源泉なのではない。ウィリアム・ペティの言うように、労働は素材の富の父であり、土地はその母である」2）、と、『ゴータ綱領批判』（1875年）においても同様に、「労働はすべての富の源泉ではない。自然もまた労働と同じ程度に、諸使用価値の源泉である。そしてその労働はそれ自体一つの自然力すなわち人間労働力の発現に過ぎない」3）と指摘されている。こうして労働力と土地が富の本源的な形成要素であり、あらゆる富の源泉であることが論定されているわけであるが、これはまた事実上、人間と自然との相互関係、つまりエコロジーに言及したものともいえよう。

『資本論』第3巻第6篇地代論の末尾では、結びに代えていう、資本主義の大工業は「より多く労働力を、したがってまた人間の自然力を荒廃させ破滅させる」が、資本主義的大農業は「地力の搾取や乱費」4）により「より多く直接に土地の自然力を荒廃させ破滅させる」5）、と。

ここで寸評する齋藤氏の当該論文は、MEGA（『新マルクス・エンゲルス全集』）のマルクス抜粋ノートの検討を通して、マルクスの「経済学批判」体系に

においてエコロジーが中心的かつ不可欠な一契機をなしていることを厳密かつ詳細に明らかにしようとしたものである。

本論文の特徴であり第一のメリットは、マルクス経済学体系のうちにエコロジー思想が存在することを抜粋ノートの精密な検討によって解明したことである。これまでもマルクスがエコロジー経済学の先駆者だという主張はないわけではないが<sup>6)</sup>、これほど包括的かつ詳細に資料的に裏付けられたものは初めてである。

その際さらに、人間と自然との物質代謝が資本の論理によって攪乱ないし変容されるところに資本主義的生産の矛盾を見るマルクスの視点が、初期の1850年代の「ロンドン・ノート」段階と『資本論』第一巻刊行後の、特に1868年の自然科学抜粋ノート段階とでは変化しているということも同時に明らかにされている。それは、農芸化学の父といわれる J.von リービヒと同じドイツの植物学=農学者 K.N.フラスに対するマルクスの評価の変遷を克明にたどることを通して行われている。これが本論文の第二のメリットである。

また、そうした作業が原典=新メガ (MEGA) に基づいた厳密な文献考証によって遂行されていることも本論文の第三のメリットとあってよい。

こうした本論文の問題意識が、著者のいうように、「現代の資本主義社会が直面する世界規模の環境問題」、換言すれば、資本主義的發展に伴う現代の地球規模での自然環境破壊問題=地球環境危機に対する「根本的批判」を意図するところにあったとすれば、その意図がマルクス「経済学批判」に内在して成功裏に成し遂げられていると評価しうることから、実にこの点こそ本論文の最大のメリットというべきかもしれない。この射程には、先進資本主義国たる欧米さらに日本に限らず、冷戦終結後のブリックス BRICs などの新興諸国、とりわけ「改革・開放」以来資本主義的發展のグローバルな生産力展開の矛盾と限界を、今日の北京・上海の薄暗い大気汚染と環境破壊によって象徴する「国家資本主義」<sup>7)</sup> 中国も含まれることになるのは必定である。

評者は、本論文の全体を通して著者の並外れた語学力だけにとどまらないマルクス経済学研究者としての相当な力量を実感させられた。方法論的・哲学的基礎に裏付けられた現代資本主義経済の理論的解明、これが著者の基本的な立場であると思われる。その立場は、全体としての社会を設計しなすための方法は存在しないから「部分工学」に禁欲すべきとする主流派経済学や「三段階論」を方法論的な旗幟とするマルクス解釈論=脱マルクス派とは当然相容れないものであろうが、それゆえにこそ著者の今後の研究発展がおおいに期待されるところでもある。社会科学の真価が問われている今日だけに、なおさらの感

は否めない。

- 1) Kohei Saito, *Natur gegen Kapital: Marx' Oekologie in seiner unvollendeten Kritik des Kapitalismus*, campus Verlag, Frankfurt 2016, Taschenbuch 328 Seiten.

博士学位請求論文は、以下のごとし。

Kohei Saito, NATUR GEGEN KAPITAL. MARX' ÖKOLOGIE IN SEINER UNVOLLENDETEN KRITIK DER POLITISCHEN ÖKONOMIE. Dissertation zur Erlangung des akademischen Grades Dr.phil. eingereicht an der philosophischen Fakultät I der Humboldt-Universität zu Berlin. 2014.

この論文の中で著者の斎藤氏は、大谷禎之介著『図解 社会経済学』（桜井書店2001年）が氏にとって「多くの点で『資本論』への導きの糸として役立っている」（Dissertation, S.110）と注記している。両氏に共通しているのは、ステロタイプの「マルクス主義」すなわちソ連・東欧型の「既製マルクス主義」とは異なって、「マルクスによってマルクスを理解」（大谷、同上書「あとがき」、415ページ）しようとする基本的な姿勢であろう。

- 2) K. Marx, *Das Kapital* Bd. I, *Werke* Bd. 23 S. 57-8. 邦訳『マルクス=エンゲルス全集』第23巻第1分冊58ページ。
- 3) マルクス, 望月清司訳『ゴータ綱領批判』岩波文庫 1975年, 25ページ。引用に際し一部改訳。
- 4) K. Marx, *Das Kapital* Bd. III, *Werke* Bd. 25, S. 820. 邦訳『マルクス=エンゲルス全集』第25巻第2分冊1040ページ。
- 5) K. Marx, *Das Kapital* Bd. III, *Werke* Bd. 25, S. 821. 邦訳『マルクス=エンゲルス全集』第25巻第2分冊1042ページ。
- 6) John Bellamy Foster, *MARX'S ECOLOGY: Materialism and Nature*, Monthly Review Press, 2000. 渡辺景子訳『マルクスのエコロジー』こぶし書房2004年。

長島誠一『エコロジカル・マルクス経済学』桜井書店, 2010年。長島氏によれば「マルクス=エンゲルスは、20世紀前半までの経済学者の中で唯一のエコロジストでもあった」（「グローバル資本蓄積の矛盾とエコロジカル社会主義」, 『経済理論』第48巻第1号, 桜井書店, 2011/4, 4ページ）。

- 7) 「国家資本主義」については、さしあたり拙稿「『組織された資本主義』と『国家資本主義』—現代資本主義の把握のために」、本誌『経済志林』第80

巻第2号 2012年12月を参照されたい。

「国家独占資本主義」と「国家資本主義」との差異が現代マルクス経済学において、もっと論じられてよいだろう。米中帝国主義対抗が、すなわちアメリカ国家独占資本主義と中国国家資本主義との対抗が、ポスト冷戦帝国主義段階の、すなわち資本主義的発展のグローバリゼーション段階の主要矛盾となっているだけに、なおさらである。

